

かす、ただ己の意業の所得なり。(中略)身口の表頭をそろえざれば一念帰命を成ぜずというにはあらず」とあり、身口意の三業は帰命の一念に並具せずと明かす。(三丁右)

(4) 崇廓師述『古二十邪義』一丁右、三丁左参照。『古二十邪義』には、真宗相承の中で、古来より当時の邪執異計を略述して二十種の異安心を挙げて正統の安心に非ざることを示し、口業、意業頼みを異安心と位置づけている。

親鸞の「浄土」について

加藤 智見

哲学や倫理と異なる宗教の特質はどこにあるのか、という角度から、今回は親鸞の「浄土」のとりえ方を取り上げ、考えてみたい。

親鸞の浄土のとりえ方を調べていくと、少なくとも次の三つのとりえ方があると考えられる。第一に、浄土は現世の今、ここで出会い体験する世界であるというとりえ方。第二に、肉体の死後、煩惱から解放されておもむく世界というとりえ方。第三に、信心が不十分で疑いがある場合、仮の浄土に入り、不信の罪を償ってから生まれる世界という三つのとりえ方があると思えるが、なぜこのようなとりえ方をしたのであるか。

第一のとりえ方は、従来の浄土が死後に往生する場ととらえられてきたのに対し、たとえば「信心のさだまるとき往生また

さだまるとなり。来迎の義則をまたず」(『末燈鈔』)とし、浄土を死後のものとしないうとりえ方である。さらには「光明寺の和尚の『般舟讚』には、信心のひとはその心すでにつねに浄土に居すと釈したまへり。居すといふは、浄土に、信心のひとのころつねにゐたり、といふころなり」(同)と述べるように、信心を得る今、すでにそこに住む世界であるという。このようなとりえ方から考えられることは、死後ではなく今ここで実感し、体験できる浄土であり、今ここでの救済が志向されていることである。未来ではなく現在の救済が彼の関心の的になっているという点である。

しかし第二に、次のようなとりえ方がある点に留意したい。「なごりをしくおもへども、娑婆の縁つきて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまひるべきなり」(『歎異抄』)。いわゆる死後往生による浄土のとりえ方である。なぜ第一のとりえ方と矛盾するようなことがいわれるのか。彼によれば「真実信心のひとは」「ころはすでに如来とひとし」(『末燈鈔』)いのであるから、今、浄土に住み得るはずであるが、人間は煩惱に支配され、なかなかそれができない。そこで肉体の死後、今度は真の浄土に参らせていただくというとりえ方をするのである。このようにあえて矛盾するようなことをいうことに、私はかえって親鸞の宗教性と宗教の特質を見たい。理論的には生きて浄土を体験できるはずであるが、凡夫にはそれができない。しかし、できないからといって否定したり切り捨てたりせず、死後往生のあり方も包容していくのである。このように浄土に住み切れない今の挫折感、住み切れないで死を迎える未来への

第7部会

不安感をも包み込んでいくとらえ方に留意したい。

第三に、「信心かけたる行者は、本願を疑ふによりて、辺地に生じて、うたがひのつみをつぐのひてのち、報土のさとりをひらく」(『歎異抄』)というとらえ方をする点である。浄土に往生するか否かのとらえ方ではなく、疑いの罪を償う余地を考え、真の浄土に入らせようとする思いがその基盤にある。その理由として唯円は親鸞から「信心の行者すくなきゆへに、化土におほくすすめいれられさふらふ」と教えられたことをあげている。すなわち親鸞は辺地にいる信心を欠く人々を、切り捨てることなく包容し、抱き取り、真の浄土に導こうとするのである。否定せず肯定しながら救いに導こうとしているのである。

以上、三つの角度から親鸞の浄土のとらえ方を見てみたが、まず信心を如来からたまわるといふ信仰に立つとき、浄土はその目の前に開けてくるものとなる。これが親鸞の浄土の本質であった。しかし同時に人間は煩惱を具足するゆえ浄土に住み続けるわけにはいかない。このため彼は、肉体の死後真の浄土に生まれるとし、煩惱具足の凡夫を包容しようとした。さらに信心を欠く人を、罪を償つてのち真の浄土に生まれ得るとして包容しようとした。こうしてどこまでもすべての人間を包容し救済しようとする浄土をとらえ直していく態度の中に、私は親鸞の宗教性と哲学や倫理と異なる宗教の特質の一端を見ておきたい。

超越論的自覚と親鸞の「三心」釈

中山 一 萱

哲学の西洋的展開、とくにデカルトに代表される近代的自我の理性論的立場は、やがてカントに至って「思惟」を体とする理性の独断性に対する、理性自身の超越論的自己批判に晒されることとなった。そのことは哲学の画期的展開であったのは云うまでもないが、一方では人間の本性(形而上学)に関する理性の限界の自覚を闡明にするものともなった。それは見方によつては真に理を尽くし、意を尽くして、この私の「自己」とは何かを問うのとは、むしろ背離するような方向への思弁的純化にほかならなかった。カントの「純粹統覚(tie reine Apperzeption)」は、そのことを端的に示すものである。

哲学はいつの時代でも、理性に基づく独断的处理を免れ得ない。それに対し我々の真の自己は、「如来選択の願心」(信巻・序)に投げ入れられた、謂わば「被投的企投」として、「現前の境遇に落在」(清沢)する自己である。「被投的企投(geworfener Entwurf)」とは、云うまでもなく、ハイデッガーの「実存」を意味する言葉ではあるが、彼の立場に立つ限り、人間の根本には、彼自身の左右できない「被投性(Geworfenheit)」が存在するのであり、そこに我々の自己の「事実性(Faktizität)」というものがある。ところで被投性即ち、無(Nichts)のうちへ投げられて有るという「実存」としての自覚は、人間